

## ブリーフィング・メモ

### 戦略とは何か

戦史部第1戦史研究室教官 石津朋之

不思議なことに今日の日本では、「戦略」という言葉を聞くとそれは経営学や経済学に  
関係する用語であり、その源が軍事にあるという事実すら知らない人々が多い。試しに書  
店に立ち寄って戦略のコーナーを見てもらいたい。そこは、まさに経営戦略やビジネス戦  
略に関する著作であふれており、戦略の軍事及び安全保障の側面に焦点をあてた書は、ご  
く少数に限られている。もちろんこうした現象は、なにも憂慮すべきことではない。なぜ  
なら、本来は軍事の領域だけに限られていたこの言葉が、徐々にではあるがそれ以外の研  
究領域でも確実に市民権を得つつある証左であるからである。

だが同時に、戦略という言葉が単なるキャッチ・フレーズへと化してしまわないため  
にも、そして、今日、少しずつ盛り上がりを見せている軍事や安全保障の領域における戦略  
問題をめぐる議論に資するためにも、その言葉の意味するところを押さえておくことは無  
駄ではないであろう。

戦略とは何か。まずはその定義から考えてみたいのだが、残念ながらこの言葉は、極め  
て多義的かつ曖昧なものであると認めざるを得ない。実際、『戦略の形成——支配者、国  
家、戦争』のなかの戦略決定のプロセスに関する論考「はじめに——戦略について」でウ  
ィリアムソン・マーレーとマーク・グリムズリーは、戦略という用語を定義しようとする  
試みの限界を指摘する。同書において戦略とはむしろ、偶然性、不確実性、そして多様性  
が支配する世界で状況や環境を変化させる恒常的なプロセスであると捉えられており、  
敵・味方の相互作用と深く関係するものである。ここに、戦略の「プロセスをめぐる側面」  
が認められるが、確かに戦略とは、不可測な要素が支配する領域であり、また、戦略を遂  
行するにも相手の存在があるため、優れて認識（パーセプション）をめぐる問題にならざ  
るを得ないのである。

だが、こうした戦略の多義性や曖昧性を認めつつも、カール・フォン・クラウゼヴィツ  
ツやバジル・ヘンリー・リデルハートが示した定義は、戦略を考えるための出発点として  
今日でも有用である。例えば、クラウゼヴィッツはその著『戦争論』で戦略を「戦争目的  
を達成するための手段として戦闘を用いる術（アート）」と定義しており、リデルハート  
は『戦略論——間接的アプローチ』のなかでこれを「政治目的を達成するために軍事的  
手段を配分・適用する術（アート）」としているが、こうした定義が示唆することは、戦略  
とはただ単に戦争を遂行するためだけのものではなく、例えば戦争を回避するための方策、  
抑止、さらには戦後のより良い平和を構築する方策といった要素を含んだ広義の概念であ

るということである。実際、こうした定義をさらに敷衍してマイケル・ハワード卿は、『第二次世界大戦におけるイギリスの大戦略』シリーズの自著のなかで「20世紀前半の大戦略とは、戦時における国家政策の目標を達成する目的で、基本的に富、マンパワー、工業力という国家資源の動員及び配分、そして同盟諸国の国家資源、可能であれば中立諸国の国家資源をも動員及び配分することである」と述べている。また、コリン・グレイにとって戦略とは政策と戦闘の橋渡しをするものであり、そして戦略家とは、政策が掲げる目標のために軍事力(あるいはその脅し)を行使する実践的なエキスパートでなければならないのである。こうした上記のすべての定義が示唆するところは、戦略には「目的をめぐる側面」と「手段をめぐる側面」が存在するという事実である。

もちろん、先述したように戦略という言葉が軍事や安全保障、さらには高次の国家政策レベルの領域に限られていた時代とは異なり、今日のようにこれが経営学や経済学、さらには環境学といった領域でも普通に用いられていることを考えると、もはやこうした定義だけでは不十分であることは明らかである。なるほど経営学や経済学の領域でもその意味するところについてコンセンサスが得られているわけではないが、一部には巧妙かつ長期的な計画といった意味で、すなわち、手段を示すものとして用いられている。同時に、それは達成すべき目標、すなわち目的を示すものとしても語られる。そしていかなる領域において戦略を語るにせよ、その目的に注目するに際して重要となるものは、「決定性」(decisiveness)という要素である。つまり、それは勝利あるいは成功のことである。戦略が勝利や成功を目的とし、また、それらと密接に関係する概念であることは疑いない。

このように戦略とは、時代状況や語り手の立場によって、また、その意味するところの領域や切り口の違いによって、定義が多様化し得るダイナミックな性質の言葉であることを覚えておく必要がある。

次に、影響という観点から戦略について考えてみよう。我々が戦略を語る際、しばしばクラウゼヴィッツやリデルハートの影響という表現が用いられるが、はたしてこうした戦略思想というものは、この小論が主として扱う国家戦略のレベルであれ軍事戦略のレベルであれ、現実の政策決定に何らかの影響を及ぼし得るのであるだろうか。「影響」とは一体、何を意味するのか、そして、その影響はどのように評価されるのかといった根源的な問題の存在を認めただうえで、この問いに対する筆者の率直な回答は限りなく否に近い。戦略思想というものが直接的に政策決定に影響を及ぼし得た事例は、過去、殆んど存在しないように思われるし、またその影響は、せいぜい間接的なものに留まる。確かに、クラウゼヴィッツやリデルハートの思想がものの考え方に対する大きな全般的枠組みを提供し得てきたことは事実である。だが、この両者はむしろ例外的な存在なのであり、残念ながら歴史の教えるところでは、戦略思想の影響なるものが窺える時とは、その時代の政策決定者や軍事政策決定者が、自らの方針を正当化する目的である思想の一部を援用する場合に限られるように思われる。バーナード・ブロディはかつて、「戦略とは実践的でなければ意味

をなさない。・・・（中略）・・・結局、戦略理論とは行動のための理論に他ならない」と述べたが、この指摘は、単なる思想としての戦略と実際にある政策を遂行するための戦略の間に、埋めることの出来ない溝が存在する事実を示唆している。我々は、クラウゼヴィッツやリデルハートの思想のある一つの側面だけが、ある時代の要請に従って何度も都合よく使われてきた歴史を知っているはずである。

また、仮に戦略が都合よく援用されることがあるとすれば、いわゆる戦略思想家の影響は過大に評価されてはならない。かつてブライアン・ポンドが鋭く指摘したように、結局、政策決定者が抱える内部事情に疎い「部外者」の影響は大きなものとはなり得ないのである。戦略とは決して「真空状態」から生まれてくるものではなく、その意味では、単なる思想家のヴィジョンと実務者が遂行する戦略は異なる次元に属するものなのである。そのため、「戦略を遂行する当事者以外にとって、不可能なことは何もない」との痛烈な皮肉交じりの指摘は正鵠を射ているものである。

さらに、筆者はかつてある論考で、「戦略環境」「国内要因」「時代精神」という3つのレベルで戦略を考えることの重要性を論じたことがある。とりわけ最後の「時代精神」という要素は、不可測かつ曖昧な概念であるとはいえ、実は戦略の形成に多大な影響を及ぼし得るものなのである。もちろん、この3つのレベルのなかでどの要素がもっとも重要であるかは、その時代の状況によって異なるであろう。だが、従来からの主たる研究領域とされてきた「戦略環境」や「国内要因」と比較しても、「時代精神」という要素が戦略の形成に大きな影響を及ぼし得る事実を見落としてしまうと、戦略とは何かについて理解できなくなる。結局のところ戦略とは、好むと好まざるとにかかわらず、その時代の一般的認識に強く規定されるものなのである。

こうした事実を総合すると、なるほど戦略という言葉の厳密な定義付けを試みたり、ある戦略家の思想そのものに注目することが無意味であるとは言えないものの、より現実的な方法として戦略の形成に影響を及ぼす要因及びそのプロセスを探る方が、戦略の本質を理解するための近道なのかも知れない。

戦略をめぐる問題で、今後、研究者が取り組むべき課題は数多く残されている。実際、防衛研究所が事務局を務める「防衛戦略研究会議」の席においても、このような問題は提議されている。それらは例えば、実務者にとっても後年の歴史家にとっても戦略を語る際、そこには何か根拠となるような文書の存在が不可欠であるのか。それとも後付け的なもので十分なのか。今日においては、もっとも高次のレベルの国家戦略がなければ、軍事戦略は存在し得ないのか。それとも、低次の軍事戦略（や経営戦略など）を積み上げた総体として国家戦略が存在し得るのか。さらには、戦略の不在を嘆く論者が数多く存在する一方で、いかにして戦略は形成されるのか（あるいは、されるべきなのか）といった戦略の方法論をめぐる議論が極めて低調なのはなぜか、といった論点であろう。

結局のところ、戦略とは優れて「生き残り」という極めて人間臭い問題をめぐる術（ア

ート)なのであろう。ある個人であれ集団であれ、あるいは国家であれ同盟であれ、それを構成する人間のもっとも基本的な衝動ともいえる「自己保存」が、こうしたアクターにとっては最重要の課題なのである。そうしてみると戦略とは、論理的に解明し得る明確な原理や原則というよりは、まさにものの考え方、さらには、感覚といった用語でしか表現できない類のものであるともいえる。リデルハートの用語を援用すれば、その意味で戦略とは「アプローチ(接し方)」をめぐる問題なのである。

少なくともこの小論から言えることは、その目的においても手段においても、さらにはそのプロセスにおいても、戦略とは「生き残り」を賭けての術(アート)なのであり、戦略を遂行するアクターの「生き様」に他ならないのである。

### 参考文献

ウィリアムソン・マーレー、マクレガー・ノックス、アルヴィン・バーンスタイン共編著、石津朋之、永末聡監訳、「歴史と戦争研究会」訳『戦略の形成——支配者、国家、戦争』(中央公論新社、2007年)

石津朋之著『リデルハートとリベラルな戦争観』(中央公論新社、2008年)

本欄は、安全保障問題に関する読者の関心に応えると同時に、防衛研究所に対する理解を深めていただくために設けたものです。御承知のように『ブリーフィング』とは背景説明という意味を持ちますが、複雑な安全保障問題を見ていただく上で本欄が参考となれば幸いです。なお、本欄における見解は防衛研究所を代表するものではありません。

ブリーフィング・メモに関する御意見、御質問等は下記へお寄せ下さい。ただし記事の無断引用はお断りします。

防衛研究所企画室

専用線：8-67-6522、6588

外線：03-3713-5912

FAX：03-3713-6149

※ 防衛研究所ウェブサイト：<http://www.nids.go.jp>